花菖蒲の歴史―明治から戦前まで

椎野昌宏

日本花菖蒲協会は本年 2010 年に創立 80 周年を迎え、伝統の重みと会員の誇りをあらためて感じます。昭和5年（1930 年）6月に東京の日比谷公園で発会式をあげましたが、筆者は翌年の昭和6年（1931 年）4月に横浜で生まれましたので、ほぼ同じように長い齢を重ねてきたものだという実感があります。

さて花菖蒲の歴史を辿る場合、3つの時代区分に分けて記述するのが最も理解しやすい道のりではないかと思います。第1期は松平菖翁を中心として江戸園芸の代表花を作り上げた時代、第2期は明治から戦前にかけての文明開化から動乱時代、第3期は戦後から現代にいたる国際化による洋種園芸との競合時代です。第1期については古い文献の狩猟や保存されている江戸古花などの研究などにより明らかにされています。また第3期については日本花菖蒲協会の活動や会報、文献などにより詳しく説明、記録されています。筆者の考えでは第2期は戦争という不幸な事態があったため、せっかく明治、大正、昭和前期にかけ花菖蒲園芸は着実に盛り上がりをみせたに拘わらず、記録の散逸や保存株の消失により、曖昧で空白の部分が多いのではないかと思います。そのためか花菖蒲に関する諸文献でもあまり触れられていません。日本自生のノハナショウブ(*Iris ensata*)からの純粋培養である花菖蒲を日本の園芸文化として後世に残していくための基礎資料として、第2期の資料の収集調査により、系統的にその歴史を記述し、皆様に知っていただくために本稿を執筆します。

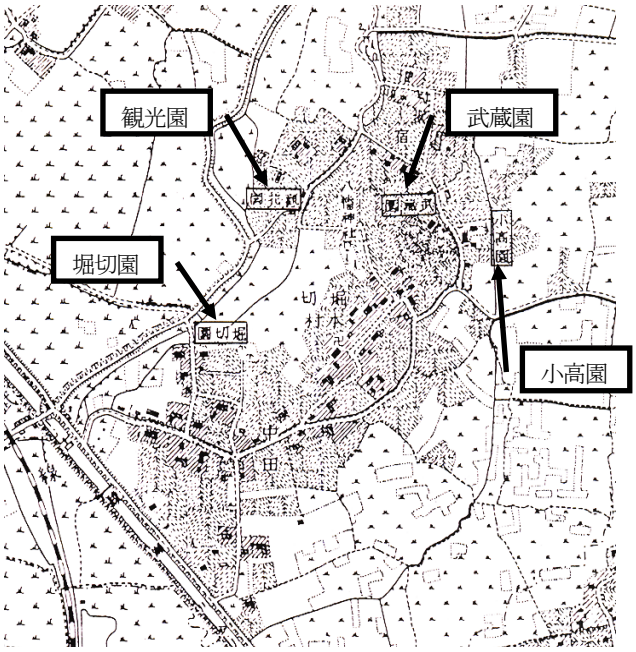
（注：本稿が対象とする時期にはノハナショウブは植物学名として *Iris kaempferi* が使用されていた。）

幕末、明治維新前夜の花菖蒲界

江戸の東方に位置した葛西領では古くから草花の栽培が盛んで、菊や花菖蒲などの供給地として知られていました。堀切村の小高伊左衛門は享永から天保年間(1830-43)の間に花菖蒲園を開園し、江戸人士に公開しました。花菖蒲改良の祖といわれる旗本、松平菖翁の作出した品種も譲り受け、江戸系を中心にかなり品揃えが豊富であったようです。やや遅れて堀切村の座間勘蔵も武蔵園を開園し、江戸末期の世情混乱にもかかわらず、開花期にはたくさんの人々が江戸から観賞にやってきたようです。4月には荒川沿岸の田島が原、浮間地区ではさくらそうが、6月には堀切地区の花菖蒲が花名所として殷賑を極めました。

熊本では藩主細川斉護(1804-60)が江戸屋敷用人の吉田潤之助に命じて、松平菖翁より花菖蒲の株を取得させ、その栽培技術を学ばせました。これをただちに熊本に移し、数年後には藩士たちに分け与え、研究、栽培させました。彼らは藩主からの下賜であるとして尊び、武技の延長として、育種されたものが熊本花菖蒲であります。菖翁から譲り受けた品種は宇宙を含む 23 品種であったといわれています。連を組織して、名花を生みだすよう競争しましたので、この時期は花菖蒲の熱気が武士階級の間に盛り上がりました。

伊勢の松阪に住む吉井定五郎 (1776-1859) は近郷のノハナショウブの中から変ったものを採取し改良するとともに、参勤交代の機会に藩主が持ち帰った江戸の花菖蒲の血もいれて、花弁の垂れた狂いのでる独自の系統、伊勢花菖蒲を生み出しました。伊勢の園芸を代表する3名花、伊勢撫子、伊勢菊、伊勢花菖蒲の花弁はいずれも垂れて狂いがあります。一般に普及したのは明治以後のようです。当時は人里はなれたところにノハナショウブがたくさん自生していたでしょうが、園芸化され今日まで伝わっているのは以上の3地区です。江戸と近郊の堀切が花菖蒲を一般に普及させる導火点となりました。それまでの大名庭園を中心とする宮廷園芸から一般人の経営する民間園芸へ、個人の栽培から植物園へと転換させた動きに注目しましょう。続いて主題で



明治 42 年参謀本部測量図一部（葛飾区郷土と天文博物館増）

ある第2期の花菖蒲の歴史について詳述します。

横浜開港後の外人居留地に起こった花卉需要

1859年に開港後、全国に魁して多くの外国人が横浜に居住しましたが、彼らの花卉愛好熱は高く、室内に花を飾り、庭に花壇を作りました。近隣の植木職(造園業)がその工事、供給をしていましたが、居留地の外人が増加するにつれ需要が増大し、植木職は本格的に花卉の栽培を始めました。当初は日本在来の菊、芍薬、花菖蒲、桔梗、百日草などの草花、ツツジ、山茶花、牡丹、マサキ、南天、花桃、レンギョウなどの花木を扱っていました。その後いちはやく居留地で開業したボーマー商会やジャーメインなどが外国草花の輸入、日本花卉の輸出を始めました。バラ、フリージアを皮切りに、西洋式温室の設置により、カーネーション、ベゴニア、フクシャ、ゼラニューム、シネラリア、プリムラ類、アスパラガス、ヘリオトロープ、バイオレットへと栽培の種類をひろげていきました。当初は居留地需要を対象にしていましたが、だんだんと日本人の間にも浸透し、周辺農民が種苗を仕入れて盛んに栽培をするようになりました。

当時の来日外国人には花卉愛好家が多く、植物にも深い知識を持っていましたので、在来の日本の植物、菊、花菖蒲、ユリ、朝顔、さくらそうなどの伝統花や、盆栽などの伝統様式にも興味を寄せました。このことが後の外国向けユリ根貿易(輸出)へと大きく発展し、また後述する横浜植木会社による花菖蒲の欧米輸出の活況へとつながって行きます。

堀切地域花菖蒲園の盛況

江戸時代末期に堀切地域には小高園、武蔵園の2つの花菖蒲園があり、江戸人士の行楽地となっていましたが、明治20年に四つ木の曳舟川沿いのお茶屋吉野屋が同所に花菖蒲園を開園し、さらに明治末年に堀切園、観光園、大正から昭和始めにかけて四つ木園、菖蒲園が加わりました。そのほか栽培農家で菖蒲園と称したものなども多数あり、堀切地域はまさに花菖蒲の一大行楽センターとなりました。このようにひとつの地域でひとつの種の植物をたくさんの園が競って観光目的で栽培している例は古今を通じてほかには無いのではないかと思います。綺麗に着飾ったお洒落な女性たちや、帽子をかぶった礼服の男性たちが花を観賞する姿が浮世絵などに画かれ、当時の花菖蒲観賞の熱気が伝わってきます。また古い老舗の小高園は激変する明治維新の折、花菖蒲をたくさん所蔵していた松平家から株をことごとく引き取って避難させ保存したといわれており、堀切地域は江戸系花菖蒲のメッカとなったのです。その後明治神宮や戦後再開された堀切菖蒲園などにも貴重な古花が移されて保存され、現代でも観賞することができます。また少し離れた茨城県南部の潮来の地でも江戸系の花菖蒲が盛んに栽培され、奥州航路の船宿として、文人墨客を楽しめさせたという記録が残っています。これが現在の観光地、潮来のアヤメ(花菖蒲)に受け継がれていったのです。

堀切の花菖蒲園(横浜開港資料館蔵)

外国人女性の堀切の花菖蒲園見学記

マリー・アンガー(Mary Unger)女史が明治34年(1901)に「わたしの好きな日本の花」(The Favorite Flowers of Japan)で書いた花菖蒲園見学記を紹介し、当時

(宇宙)明治二七年小高園図譜

(大鳥毛)

(昇龍)

(月下波)

(立田川)

(葛飾区郷土と天文博物館増)

の外国の人が初めて見た花菖蒲の新鮮な驚きに触れてみます。（注：前記横浜のボーマー商会2代目経営者のドイツ人園芸家アルフレッド・アンガー夫人）

「6月の花の聖地巡礼に向かって、私たちは東京を後にし、広い墨田川の土手に沿って数マイルも続く並木道に入りました。東京から2マイルほどの向島村への道の両側には桜並木が続きます。桜の花が満開になる春にはきっとたくさんの人々が集まり、お花見を楽しむのでしょう。桜の開花シーズンほどの人出ではないかもしれませんが、6月のこの晴れた日、歩道はかなり賑わっています。みな着飾って、期待をふくらませ、お祭り気分で、向島から歩いて10分位の所にある、堀切村に向かっています。そこには華麗な花菖蒲を観賞できる日本で一番有名な庭園群があり、西欧の美意識とは異なった、日本古来の自然の美しい特徴が完全に残っています。庭園に入ると、松の木を植えた小さな丘に沿い、長い狭い小道が続きます。松林の中にはたくさんの夏の家があり、そこから素晴らしい庭園風景が一望できます。熟練した栽培技術により、100種以上の品種群が育っています。紫、青、青紫、白色や、赤みがかった色調のもの、単色のもの、斑点入り、縞入り、刷毛目入りのものなどあり、緑の松の木蔭から眺めると、それぞれの色彩が一筋の清流のようになって流れるように見えます。このような美景を称えて即興の詩を作るのが日本人の得意な習慣なのでしょうが、残念ながら私たちにはそのわざが備わっていません。私たちはゆっくりと、菖蒲田をジグザグにつなぐ絵画のような架け橋を渡りました。そこからは間近に優雅な花の姿を見ることができます。開いた花弁に触れると折れてしまうので、蕾のときに切って飾り、それから花を開かせて楽しむのがよいのですと庭園の主人が言っていました。なんと花菖蒲はこわれやすく繊細な花なのでしょう。日が落ちて、影が長くなり、私たちの聖地巡礼の旅は終りに近づきました。人力車をみつけ帰路につきました。今日観賞してきた花菖蒲を横目にみながら人力車は走りました。堀切の花菖蒲園を訪れてみて初めて、花菖蒲の花の姿と色彩が本当に素晴らしいことが分りました。」（筆者訳）

霓裳羽衣(上)、蝦夷錦(下)

大鳥毛(上)、真鶴(下)

笑布袋(下)、鶴の毛衣(上)

（大正年間横浜植木（株）図譜、同社蔵）

明治神宮御苑の花菖蒲

明治後、井伊家の屋敷から宮内省の代々木御苑へと変ったこの地域に菖蒲田ができたのは、明治26年(1893)でした。周囲に武蔵野の自然林をしつらえ、深い森とし、外界からの雑音が聞こえない別天地としました。大正4年(1915)明治神宮に引き継がれた時点で、花菖蒲は80種ほどでありましたが、奉納の数は増加して150種余りになりました。創設当時から主として堀切方面から優秀な品種を集め、少量の伊勢花菖蒲も加わりましたが、御苑の沿革からして、江戸系花菖蒲を主体とすることが貫かれてきました。

明治初期の小高園番付表による花菖蒲人気品種

江戸園芸花については相撲の番付にならって、評価するしきたりがありましたが、これは一般の人々に向かっての宣伝手段であり、また栽培家たちの競技の場でもあったのでしょう。花菖蒲についても堀切地区の各園が出した番付表が残っていますが、明治16年(1883)の小高園発行花菖蒲番付表のうち位の高いものを紹介します。（図参照）

中央の欄に特別職として

行司　稲妻　霓裳羽衣

年寄　奥津白浪　月下浪

勧進元　鳳凰冠

差添　宇宙

力士の欄に役力士として

東方　大関　笑布袋

関脇　大淀

小結　座間森

西方　大関　真鶴

関脇　酒中花

小結　綾瀬川

前頭以下総勢　120力士

となっています。後年、堀切園や、武蔵園の出した番付表を見ても宇宙や霓裳羽衣などの地位は高く、名花は昔も今も同じなのだと思います。

花菖蒲の国際化のため横浜植木株式会社が果たした役割

その1）明治時代に横浜と蒲田に花菖蒲園があった

筆者は横浜生まれのハマッコですが、明治時代に横浜に花菖蒲園があったということを知り驚きでした。明治23年に発足した横浜植木会社は始めの頃は所在地の山手に連なる唐沢の地で輸出用の百合や花菖蒲を栽培していましたが、増加する需要に備えるため明治30年に久良岐群屏風ケ浦磯子の地に(現横浜市磯子区磯子3丁目)、磯子菖蒲園を開設しました。手許にある絵ハガキをみると山すその細長い地に白や紅紫、桃色の花が咲いており、日傘をさした着物姿の女性3人と半纏姿の男性1人があぜ道に立っています。面積は約6反歩(1800坪)で小規模なものです。

その後、増えた海外からの需要に応じきれなくなったため、代わりの圃場を探し、東京府荏原群蒲田村字北蒲田の約3万坪の土地を見つけました。そこに明治36年(1903)蒲田菖蒲園の名で圃場を開き、磯子菖蒲園は閉じました。新しい圃場は東京市場の需要を満たす花卉生産地ともなり、花作りが専門で、輸出用の花菖蒲以外に、沈丁花、牡丹、段菊、日々草、ケイトウなどの切り花をやり、のちに洋種花卉も扱うようになりました。その姿は横浜植木株式会社百年史につぎのように活写されています。

「当時の蒲田は、一面の田園地帯で、周囲が広々としていることもあって3万坪の菖蒲園も数字ほどには広く見えない感じがしたほどであった。近くを鉄道線路が通っていたが、当時はまだ蒲田駅は出来ておらず、横浜から行くには汽車で川崎駅か大森駅へ行き、そこから人力車に乗るか歩いて行くほかなかった。」

「蒲田に開設した菖蒲園は、毎年開花期を迎えると無数の花が見事に咲き乱れ、壮大な花園に一変し、たちまち東京有数の花の名所として知られるようになった」人出の多かったことが鉄道に蒲田駅を開設する理由の一つとなったようです。

もうひとつ記録しておかなければならないのは横浜市中区にある三渓園にあったかなり大きな花菖蒲田です。庭園建設時には谷が三段になって一面に野菜畑がありましたが、谷の中央を掘って川を作り、掘った土を盛って庭園の形が出来上がり、そこに明治39年から41年(1906-1908)にかけて小向井や杉田の梅林などから約1100本の梅を仕入れて植え付けました。その結果見事な花を咲かせ、春の花の隧道ができて、たくさんの人出がありました。しかし、海際にあるためその後の大暴風雨で根こそぎにされて僅かきり残りませんでした。そのあとに植え付けられたのが横浜植木会社から仕入れた96種10万株の大量の花菖蒲で、蓮池(現在の大池)に十間四方の碁盤目に分けて菖蒲田を作りました。(多分横浜植木の磯子から蒲田への移転にともなって生じた株をあてたと思われる)。一時はかなり賑やかに菖蒲を咲かせましたが、残念ながら塩害のため長続きしなかったようです。今日、三渓園で見られる花菖蒲は戦後昭和34年(1959)に明治神宮より入れたもので、栽培規模は小さくなりました。

磯子花菖蒲園(横浜開港資料館蔵)

横浜三渓園花菖蒲田(三渓園蔵)

その2) 花菖蒲を輸出し欧米に定着させた

花菖蒲が外国に正式に紹介されたのはフィリップ・フランツ・フォン・シーボルト(Philipp Franz von Siebold (1796-1866)が19世紀中頃にオランダに持っていき、自分の経営するライデン気候馴化園で栽培してヨーロッパに売り出すカタログに掲載されたのが始めてです。(注:拙稿「花菖蒲と桜草-世界の窓を開いたシーボルト」園芸ニュースレター64月号参照)

取引として外国に輸出されたのは小高園が初めてで、記録によると「明治10年(1877)米国人某氏ノ乞ヒニ依リテ花菖蒲数百根ヲ彼ノ国ニ輸レリ、是ヨリ年々津田仙及ヒ鈴木卯兵衛ヨリノ依頼ニヨリテ、国内ノ菖根ヲ海外エ輸出スル事トナレリ、」と記述されています。(注:元祖花菖蒲小高園由来小高伊左衛門、1895より)鈴木卯兵衛は前述の横浜植木株式会社を設立した人で、花菖蒲の本格的輸出は同社

によって展開されていきます。

横浜植木株式会社の外国向け英文カタログ明治25年(1892)版にはIRIS KAEMPFERIとして、3つにタイプに分け24品種が載っています。価格は100株あたり$12.50。参考までに下記リストアップしてみます。(原英語綴りのまま記述、括弧内和文品種名は筆者が記載)

白色タイプ

Sano-watari　(佐野渡り、熊本系)
Zama-no-mori(座間の森、江戸系)
Gekka-no-nami(月下の波、江戸系)
Haku-botan（白牡丹、熊本系)
Kichi-bokuo（不明)
Banrai-no-nami（万里の波か?)
Haku-o-den（白翁殿か?江戸系)

暗褐色、えび茶色(紅紫）タイプ

Shichiuka(酒中花、江戸系)
Oki-no-kagaribi(沖の篝火、江戸系)
Uji-no-kawa(不明)
Banrai-no-hibiki(不明)

斑入り（覆輪）タイプ

Idumigawa(泉川、江戸系)
Katsurao(桂男、江戸系)
Tatsutagawa(立田川、江戸系)
Satsuki-no-ame(不明)
Shippo(七宝、江戸系)
Tamatorihime(不明)
Suma-no-ura（須磨の浦、熊本系)
Noboriro(不明)
Shi-un(紫雲、熊本系)
Oshokun（王昭君、江戸系)
Musashi-no-tsukasa（不明)
Yen-uno-sora（不明)
Karako-asobi（不明)

以上の3タイプに分けることには無理があり、その後のカタログ明治42年(1909)版では新品種・稀品種と一般種の部にわけ、価格差を設けています。種類も大幅に増え、新品種・稀品種の部には18種あり、全部こみでセットあたり$4.00、100株あたり$18.00としています。そのなかにはRenjyou-no-tama(連城の璧、江戸系)、Yamato-zukasa（大和司、江戸系)などが顔を見せています。一般の部には50種あり、100株あたり$7.50となっています。O-torige（大鳥毛)Kuma-funjin（熊奮迅)、Oyodo（大淀)、Gei-shorui（霓裳羽衣）などの江戸系が含まれています。

横浜植木株式会社は当初から貿易志向が強く、明治31年(1898)には米国のニューヨークに支店を設け、横浜からの花菖蒲の輸出取引のみならず、米国で小売りもしました。勿論当時の植物輸出の花形であったユリ根も取り扱っていたのでしょうが、同社は1909年以前における日本の花菖蒲苗の最も重要な供給先であり、その後の米国の育種家や花菖蒲園のために貢献したとマッキーンのジャパニーズアイリス（Currier McEwen、The Japanese Iris)に書かれています。おそらく20世紀の初頭が米国向け花菖蒲輸出のピークであったものと考えます。

日本花菖蒲協会の創立

昭和5年(1930)年に日本花菖蒲協会が設立され、講演会及び観賞大会が開催されました。

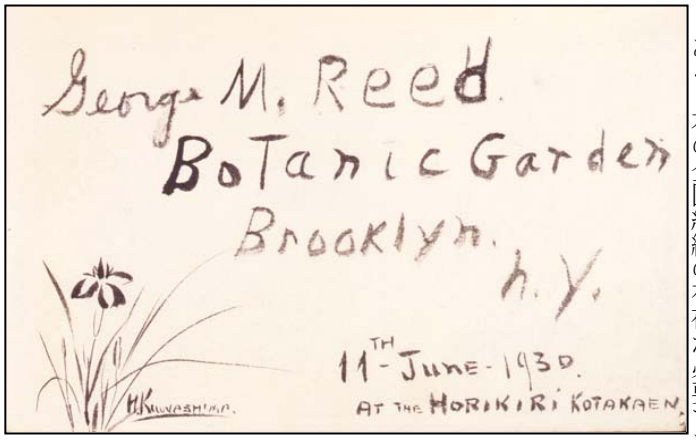
講演会　昭和5年6月20日、小高園、堀切園、吉野園で開催、出席者約300名。白井光太郎博士、リード博士、西田信常氏の講演あり。

陳列会　同年7月10日～30日、日比谷公園、出品鉢数約700

三好学博士は翌6年に発刊された創刊号会報に「日本花菖蒲協会設立に就て」と題して次のように書いています。(注：三好学、1861-1939、植物学者、花菖蒲図譜1921刊行)

「米国には米国アイリス協会が2000人以上の会員を有している。会員はいずれもアマチュアで、米国産の多数の野生アイリスの外日本の花菖蒲其の他の種類の培養に務めている。英国にもアイリス協会が設けられている。先年歿せられたダイクス氏(W.R.Dykes)は世界中のアイリスの研究者として有名な人で、同協会の為に尽力された。昨年米国アイリス協会のリード博士(Dr.G.M.Reed)及夫人は日本のアイリス殊に花菖蒲の野生並に培養の状態視察の為に来着されて、詳しく調査された。花菖蒲は欧米諸国でも培養されているが、その本国の我邦でも此の花草の培養が却って旧時の如く盛んでないのは遺憾である。…中略・・斯様な次第であるから、今回花菖蒲培養の歴史に密接の関係ある東京に於て日本花菖蒲協会が設立されたことは誠に喜ばしいことである。」

リード博士は米国ニューヨークのブルックリン植物園の園長であった人で、同氏の来訪が協会設立のきっかけとなったことは明らかで、国際的にもご本家である日本の全国組織の存在が必要であ



G.Mリード博士寄書き（葛飾区郷土と天文の博物館蔵）

りました。なお日比谷公園の陳列会には初めて熊本花菖蒲が出展され、特別陳列をなしその優秀な鉢作りには来園市民も驚愕したと伝えています。後述する西田衆芳園の故西田勇氏（前日本花菖蒲協会会長）の若い頃、園主の父信常氏を手伝って日比谷公園に花菖蒲花壇と肥後菊、熊本芍薬の花壇、いずれも5間もので大きなものを設営されたそうです。「今にして思えば『こんな大仕事が』私たちの小さな手でよくも出来たものかと、当時を振り返るばかり」と西田勇氏は述懐しています。そのとき飾られた熊本花菖蒲が東京の一般市民への初公開であったのでしょう。なお協会発足時、評議員に小高園の小高佳太郎、吉野園の吉野銓三、理事に堀切園の磯貝忠次郎などの各氏が堀切地区を代表して参画しており、堀切グループの意気込みがうかがわれます。また中心になって奔走された東京市の公園課長であった井下清氏の功績も大でありました。同氏は戦後も日本花菖蒲協会会長として活躍され、昭和48年(1973)歿せられるまで会員を指導されました。

伊勢松坂の玉蝉花（花菖蒲）の歩み

松阪で伊勢花菖蒲を生み出した吉井定五郎の没後、吉之丞が父の遺業を受け継ぎ、さらに改良し、多くの品種を世に出しました。津でも伊関堅次郎が松阪から花菖蒲を集めて栽培し品種改良しました。後に津の吉川万吉が両先達から株を譲り受け、昭和5年から16年(1930-1941)までの栽培記録を集大成した「華鏡」を残しました。伊勢花菖蒲を受け継いだグループは、花弁が垂れ、花弁に狂いを見せる伊勢の伝統を守り貫いたため、地域性が強く、全国的に広がりませんでした。戦後になって江戸、肥後、伊勢の3大系統として位置づけられ、現在でも御代の春、衆指の誉、藤袴、乙女、薄化粧、不知火などは伊勢古花として繊細な感じが好まれ、親しく栽培されています。

京都に於ける玉蝉花陳列会と幻の江州花菖蒲

日本園芸雑誌に載っている明治35年(1902)年に京都で開かれた玉蝉花展示会の記事により、そのころ栽培されていた西日本における花菖蒲の顔ぶれがわかりますので紹介します。それによると「該会ハ去ル6月18、19ノ両日北村久米蔵氏方（本会会員）ニ於テ之ヲ開キタリ該地ニ於ケル玉蝉花陳列会ハ今回ヲ以テ初メテトスト云ウ」と書かれています。出展品種は全部で70鉢、十二一重、沖津白波、竜田川、富士娘、雲衣裳などの江戸系、雲龍、藤乙女、相生、真鶴、楊貴妃などの熊本系、田子の浦、残月、紫雲（紫雲台）、おもかげ、峰の雪などの伊勢系があり、3系統が揃っています。ほかに出品者名の脇に特に江州と付記されているものが11鉢あり（比良の雪、男山、水の面、真光王、谷風、大磐石、大とき、光玉殿、鷲の島、御ての、実生1鉢）、これらは江州、すなわち近江地方で古くから作られていた江州菖蒲と思われます。江州菖蒲は前述のリード博士が帰米後、米国アイリス協会の1931年に発表した「日本におけるあやめ類」報告書によると「江州菖蒲は伊勢菖蒲にやや似ている。葉は丈低く、直立し、花梗も丈低く、葉から抽出することはほとんどない。花は小さいほうであるが、垂弁は丸く互いに重なり合い縮緬状である。」と記述されています。残念ながら江州菖蒲については文書として記録が残りませんでしたので、現時点ではこれ以上わかりません。なお玉蝉花という表現は伊勢系古花に付けられた名称と理解していますが、恐らく中国語から由来したものと思います。中国語で玉蝉花はyu chan huaと読みます。

満月会と熊本花菖蒲

武士が花連を組織し熊本花菖蒲を改良し栽培してきましたが、明治維新の廃藩置県と、西南の役による戦禍で、かれらの花連は解散しました。その後明治19年(1886)に、残った花菖蒲愛好家たちが集まって、満月会を結成しました。入会規則は極めて厳格で、現在のような園芸の大衆化、国際化の環境下にある我々にとって、まことに異質の世界に感じられることもあります。反面、熊本花菖蒲の独特の風格を作りあげた強い基盤でもあったのでしょう。門外不出を守り、一般にはほとんどその内容は知られていないため、後述の西田家によって解明された一部の花菖蒲品種をもとに探ります。

西田衆芳園による肥後系花菖蒲の紹介

熊本在住の西田家が横浜市磯子区の岡村に移ったのは大正12年(1923)のことで、この間の事情やその後の経緯については、前日本花菖蒲協会会長の故西田勇氏の「回想への招待」協会創立50周年記念号に詳しく書かれています。それによると父の信常は祖父の貞幹とともに満月会の会員として、花菖蒲の改良、栽培に努めて実績を挙げていました。信常が一念発起して関東の一角、横浜の地で、花菖蒲を中心として菊、芍薬などの肥後系植物の栽培と販売を行う衆芳園を設立しました。花菖蒲については、門外不出のものが流出して衆芳園で販売されているとして、満月会関係者から抗議の声があがったこともあるそうですが、貞幹、信常両氏が満月会に貢献したことに対するお礼であったと説明されています。結果として熊本花菖蒲が横浜から全国に広まり、西田家自身の改良種も加わって、肥後系花菖蒲として全国的にゆるぎない評価を定着させることができました。玉

洞、紫溟の秋、秋の錦、滝の瓔洛、錦木、舞子の浜などの熊本種は現在でも展示会に常連として登場しています。

宮沢文吾博士による大船系花菖蒲の改良と育種

宮沢文吾博士(1884-1968)は明治から昭和にかけてわが国の園芸学会をリードした泰斗です。戦前出版された「花木園芸」や「草花園芸」には日本種、洋種の広範囲の植物が網羅されており、園芸研究家、趣味家たちの優れた指導書でした。花菖蒲につきましては、明治43年(1910)から農林省の助成をえて、神奈川県農事試験場(現大船フラワーセンター)では芍薬、躑躅とともに品種改良を行ってきました。宮沢博士は同場の技師として在任し、その仕事を担当しました。昭和11年(1936)に「花菖蒲の品種改良成績」と題する報告書を刊行しましたが、農林省はその序文に「花菖蒲の如き花卉に在りては本邦特産のものなるのみならず夙に海外に紹介されつつあるものにも拘わらず特に改良されたるものを聞かず依りて農林省に於は之が優良品種を育成し益益本邦在来の花卉の真価を発揚し一層我花卉園芸の発達を促進せんがため・・・・」と述べています。その期待にこたえ、宮沢博士は、大正4年から9年頃(1915-1920)までに約300品種の新花を作出して報告書で発表しました。記述内容に感心するのは各個別品種の説明欄で、交配親、作出年、葉、花梗、開花期、花容の詳細などが綴られており、交配の内容、成果がよくわかります。大船系花菖蒲として現在でも同園の花菖蒲田で栽培されていますが、かなり消失してしまい、残っているのは約80種と聞いています。朽葉、無双、心の色などが名花です。宮沢博士は晩年、極早咲種系統を生みだし、没後吉江晴朗氏によってその目的は達成されました。

長井系花菖蒲の由来

長井花菖蒲のルーツは山形県南部の飯豊山系であるといわれています。飯豊町の萩生の旧家では昔から庭に美しいあやめが咲くと、お客を招いてともに愛で、風流を楽しんだと伝えられています。長井のあやめ公園は明治43年(1910)にあやめの苗を同所に植えたのが始まりといわれています。大正の中頃までに大きく発展し、昭和初期が全盛期でたくさんの来園者を集め、雪洞が点灯されて夜のあやめを観賞されたようです。長井の花菖蒲は野生のノハナショウブ(*Iris ensata*)の自然交雑により生まれたものが多く、ほとんど人手が加わっていません。長井系花菖蒲としてアグレマンをえたのは戦後ですが、ノハナショウブに近い形態として、派手ではありませんが品格があり、愛好家がかなりいます。

米国およびヨーロッパにおける花菖蒲栽培のはじまり

シーボルトのライデン気候順化園から初めて売りに出された花菖蒲は先ず英国のヴィーチ商会(Veitch Nursery)によって仕入れられ、1874～1896の間に、同社による実生栽培株の16種が王立園芸協会(The Royal Horticultural Society)から第1級の認定書を得ました。フランスでもかなり早い時期に仕入れられ、1893年の園芸店のカタログに初めて花菖蒲が紹介されました。ドイツでは前述の明治初期に横浜で植物貿易を始めたボーマー商会がハイデルベルグ(Heidelberg Schierbach)にあるアルフレッド・アンガー(Alfred Unger)園芸店に花菖蒲を輸出し、そこで実生栽培された多数の苗株が米国にも輸出されました。

米国への花菖蒲の導入はシーボルトのヨーロッパへの導入より若干遅れて1869年にトーマス・ホッグ・Jr(Thomas Hogg, Jr)によってなされました。彼は日米修交条約締結後1862年に税関監査官として来日、8年間日本に滞在しました。その間、父の経営するニューヨークのホッグ園芸店にたくさんの日本の植物を送りました。そのなかに花菖蒲も入っていました。1879年付けのウールソン会社(Woolson Company)のカタログには名前のついた花菖蒲の実生苗としてヨーロッパからのものと、ホッグ園芸店のものが掲載されています。その後、横浜植木株式会社が積極的に輸出を始め、ニューヨークに事務所を設けて直接小売するなどして、花菖蒲の知名度はあがり、19～20世紀の変わり目ころには花菖蒲を栽培する者がかなり増えました。

米国花菖蒲界の2人の功労者

まず日本花菖蒲協会設立のきっかけを作ってくれた前述のジョージ・M・リード博士が挙げられます。博士はブルックリン植物園勤務中、1920年にアメリカアイリス協会と協力契約を結び、同園内にベアドレス・アイリス(Beardless Iris)のテストガーデンを設け、花菖蒲を植えてその生態、育種、病害、分類につき研究を始めました。本家の日本の花菖蒲事情を調査するため、アメリカアイリス協会の助成を得て1930年の3月から7月まで日本に滞在し、各地の花菖蒲園を訪れました。帰国後に出された報告書は、植物学者として客観的な視点で書かれており、いまから読んでも大変に参考になります。(注：日本花菖蒲協会創立50周年記念号1983年刊行に掲載。)1939年の時点でブルックリン植物園は350種の名前のついた品種を持っていましたが、1956年リード博士の死後、残念ながら花菖蒲も絶滅してしまったそうです。

つぎに挙げられるのがインディアナのアーリー・ペイン(Arlie Payne)です。

園芸家であり庭園設計者でした。1925年に園芸店より宇宙(Uchu)とマホガニイ(Mahogny)の2種を仕入れたのがきっかけで、彼は輸入業者より多種類の花菖蒲苗を仕入れ、それをもとに交配、育種を重ね、ピーク時には実生株が約100、000株にも達したそうです。彼の優れた点は詳細な交配記録を残したことで、それらは公開されています。生涯で命名された自信作170種を市場に出しており、戦後発表されたイマキュリット・グリッター(I.'Immaculate Glitter')、ブルー・ノクターン(I.'Blue Nocturn')などは有名で、日本でも栽培されています。米国における花菖蒲の祖といわれる人で、アメリカアイリス協会の花菖蒲部門の年間最優秀品種賞はペーン賞(Payne Medal)と名づけられています。

野生ノハナショウブの調査・研究

野生花菖蒲（ノハナショウブ *Iris ensata*）に関する戦前の文献はあまりありませんが、三好学博士が昭和10年(1935)に「東京府史蹟名称天然紀年物調査報告」で書かれたものを紹介します。「ノハナショウブは東北地方より西南地方に至るまで山中又は低地の湿原に生じ、往々大群落を形成す。かきつばたの如く絶対水生植物に非ざるを以て、比較的乾燥せる土壌にも発生するを得。」として日光赤沼原、別府温泉の背後にある由布岳、岩手県花巻地方などをあげています。また「ノハナショウブ群落における茎の高さ、花の大いさ等の如き、固体間の差異は著しからざるも、花色の変化は著しきものあり。」として赤紫色のものが標準で、まれに青紫色のものがあり、赤紫～青紫色の薄くなったものの3タイプに分けています。また「ノハナショウブの花形は殆皆外花外蓋の著大となれるもの即ち三弁花なるも、稀には三片の内花蓋が同様に著大となり、所謂不弁花を成すものあり。また時としては花の部分が4の数となり、彼の培養花菖蒲の「十二一重」の如くなれるものあり。」として一見何等の変異が見えない群落においても個体間には著しい奇態が出現すると述べています。博士は周知のように埼玉県の田島が原のサクラソウ自生地が大正9年(1920)に天然記念物に指定されるにあたって奔走した方であって、実現はしませんでしたが神奈川県箱根の湿性花園近辺のノハナショウブ自生地も指定されるよう動いたという話も残っています。

堀切地域の花菖蒲園の退潮と戦後の復活

昭和の年月が経過するにつれ、堀切地域の花菖蒲園は都市化の進展と水質汚染により影響を受けて、栽培が不利となってきました。また国際関係に暗雲がたれこめてきた世相により、東京の花の名所として集めてきた行楽客も減少しました。昭和10年(1935)に吉野園と菖蒲園が、昭和17年(1942)に堀切園と小高園が相次いで閉園となりました。戦時下に向かって食料増産のため菖蒲田を水田へ転換するという時代要請もあったようです。日本花菖蒲協会は昭和5年発足後、日比谷公園で毎年花菖蒲の陳列会を開催しました。日米開戦の昭和16年(1941)には6月18日から28日まで日比谷公園で開かれ、会員9名が148鉢を西田衆芳園が200余鉢を出展したという記録があります。たぶんこの時が最後で、戦争末期に向かって動員や空襲による惨禍などで、人々は植物を育てる余裕がなくなり、陳列会も中止されたのでしょう。

戦後、磯貝家の堀切園のみが足立の親戚に疎開させていた株を元の菖蒲田に植え戻し、昭和28年(1953)有限会社堀切菖蒲園として再開しました。しかし園芸事業の公共性から、東京都の買収計画が進み、昭和35年(1960)6月から東京都立公園、50年(1975)から葛飾区立公園として一般に公開されています。

日本花菖蒲協会の活動再開

太平洋戦争のため多くの花菖蒲は喪失しましたが、戦後の復興が始まり、ようやく世の中も落ち着いてきたころ、戦前から園芸関係の経営者、研究家、育種家として活躍されてきた伊藤東一氏の奔走により、昭和27年8月(1952)に日比谷公園の松本楼で総会が開かれ、協会は再発足しました。そして昭和30年(1955)に日本花菖蒲協会会報復刊第1号が出て、新たな歩みが始まりました。花菖蒲愛好家たちの努力により、戦災を生き延びた貴重な花菖蒲株が再収集され、整理され、増殖され、改良されて、今日の園芸国際化、多様化の時代にあっても伝統園芸花の地位を保っており、さらに未来へ引き継がれていくことを期待します。

最後に本稿執筆にあたり清水弘氏より貴重な資料の提供と有益な助言を得ましたことを感謝します。

（参考資料）

日本花菖蒲協会発行の各号会報、葛飾区郷土と天文の博物館発行ブックレット8、13号及び葛飾区古文書史料集11
横浜植木植木株式会社百年史及び同社発行 Descriptive Catalogue 他各種資料
日本園芸雑誌
The Japanese Iris Currier McEwen、1990、University Press of New England